

## ナイス・ポジシヨン

どうにも性にあわないのが料理。いつだったか、チーズフォンデュをレンジで爆発させ、旦那さんに残骸を片付けてもらった。黒こげになったよく分からない物体を「がんばったね。美味しいよ」と食べてくれる彼は、間違いなく私の運命の人だろう。

「今度、地元で夏祭りがあるんだ」。毎年彼の実家では、町内でチームをつくりお好み焼きの屋台を出しているという。何にもしなくていいからさ、おいでよ。いや、そういうわけ

にはいかない。聞けば、地元のおばちゃんたちも私に会うのを楽しみにしているそうだ。求められるのは手際よさ、長男の嫁としての気配りだろう。ああ、私はこのピンチをどう乗り切ればいいのか。

彼の実家は兵庫県・三田市弥生が丘。地元のローカル線を乗り継ぎ、さらに北へと向かうと車の通りもまばらで、のどかな住宅地が広がる。通りすぎる人は皆知り合い。地元つながりが強いとは聞いていた

が、都会で育った私からすれば新鮮だった。

「あら、きれいなお嫁さん」。到着するなり、チームお好み焼きの皆さんに囲まれる。昨夜、美白パックをした甲斐があった。営業時代に鍛えた笑顔で手早く挨拶をすませる。第一印象ははずさない自信があった。ニコニコとしながら、するどい目で屋台内を瞬時に見渡す。メインとなる鉄板を担当しているのは屈強な男たち。ここは任せておけばいい。

一方、女性が数人集まっているところに目を向けると、キャベツや玉ねぎなどの野菜をザクザクと切っている。これは私が一番関わってはいけない工程だ。包丁の不器用さを見られれば、ジ・エンド。20代前半の

女子なら許されるだろうが、こっちはとうに三十路を超えている。「光平くん（だんな）のお嫁さん、何にもできない人だったね」。私は弥生が丘で一躍有名になるだろう。彼のご実家にも迷惑をかけてしまう。私はもうこの町に入れなくなるかもしれない。だめだ、それだけは避けな

ければ。しかし、あそこに入らないとポジシヨンの不自然か……。ああ、どうすれば。母よ、なぜ私に厳しく料理を教えてくれなかったのか。途方にくれかけた時、ふと鉄板横のスペースが目に入った。ソースやマヨネーズ、鰹節など仕上げの材料が置かれている。あれだ！あれこそ私の居場所だ！なんとしてもあそこを勝ち取らなければならない。鉄板にいた大将らしき人物に近づいた。

「あ、じゃあ私ここでソースかけていきましようか」「そうやな、千佳さんにお願いしようか」。大将に了承をいただいた。やった。今のナチユラルな会話、よかったよ私。やがて長蛇の列ができた。次々と

お客さんがやってくる。ただかければいいと思っていたソース係も、なかなか大変だ。タイムロスを防ぐため、あらかじめいくつか封を切り、ソース、マヨネーズ、鰹節、青のりの動線を整える。こういう仕事なら得意だ。

「千佳さん、一人にしちゃだめじゃない」

「たぶん、いま使命感に燃えてるから」

お義母さんと旦那さんの会話を背に、私は役割を全うした。乗り切った……！

「今度さ、法事があるから」

長男の嫁大ピンチ！次のナイス・ポジシヨンはどこにあるのだろうか。

